実践産出のメカニズムとハビトゥスの変容可能性とを巡って

On the Mechanism of Production of Practice
and the Possibility of Transformation of *Habitus*

平林 豊樹

HIRABAYASHI Toyoki

In P. Bourdieu's theory of practice, *habitus* is a principal concept. Also, *habitus* importantly combines with other concepts of Bourdieu, for example, "field", "capital", etc.

I examine the function of *habitus* and the possibility of its transformation, through probing into case-studies of Bourdieu and a scholar of the Bourdieu-school (P. Champagne). By this examination, it becomes clear that the theory of practice can analyze historical social changes. Additionally, I intend to show that *habitus*, which tends to reproduce objective structures of the social world, still provides for the possibility of the transformation.

1. 問題の所在

P.ブルデューの社会学に於いて、実践 (*la pratique*) は、「当事者のハビトゥス」と「社会的世界がその当事者に客観的に与えるチャンスの一定の状態」との関係によって定まる、とされている [Bourdieu, 1980 :107~109 = 1989 :103~104]。又、行為者 (*agent*) たる「当事者」は、「場」に所属し、「資本」を有しているから、「社会的世界がその当事者に客観的に与えるチャンスの一定の状態」を考察する際には、「場」や「資本」といった概念が念頭に置かれなければならない。つまり、例えば「ハビトゥス」概念を考察しようとするならば、その概念そのものについて哲学的な思索を巡らすことと並んで、それを行為者の属する「場」や「資本」との拘わりに於いて捉えることも必要だろう。

上記の内容を「実践産出のメカニズム」と呼ぶとすれば、それは、その時々状況に合わせたハビトゥスの出現である「戦略」という概念と相俟って、時代や場に拘束された行為者の実践を説明し得るものだ。だが、再生産の分析、及び構造的分析を為し得ると同時に、行為者の実践をも説明し得るブルデューの理論に対して、「階級（階層）関係の再生産ばかりを強調している」とか、「非歴史的分析ばかりである」といった、一面的な見方に基づく非難が為されているのも事実である。

例えば、ブルデューは歴史や歴史的変容を説明する気が無く、その様な説明を主眼としたことも無い、と R.ハーカーらは言う [Harker, 1990 = 1993 :296~297.] (1)。又、D.ガートマンは、ブルデューの言う「階級のハビトゥス」は経済的基礎、とりわけ収入に拘束されているが故に歴史的な説明を不可能にしている、と述べる [Gartman, 1991]。

だが、ブルデューの理論（プラチック理論 ; *une théorie de la pratique*）には、

その様な非難は当たらない。何故なら、その理論に基づいて為された研究の中には（ブルデュー自身の研究は勿論のこと、その協力者や弟子の研究も含めて）、階層関係の再生産にのみ固執している訳ではないものも多いし、歴史的説明への糸口を与えているものもあるからであり、また、本来、その理論に於いては、再生産の分析、構造的な分析と、行為者の実践の説明可能性とが結合しているからである。

本論文では、先ず、階層関係の再生産を分析の主眼としている訳ではない研究成果を閲しながら、行為者の実践と「場」や「資本」との関わりを考察する。それによって、ブルデューの理論に対する非難の一つが解消するであろうからである。

続いて、その考察を踏まえた上で、ブルデューの理論へのもう一つの非難、即ち、「非歴史的な分析である」という偏見を、取り除く。この様な非難が為される背景には、「再生産」という言葉を単なる「コピー」と受け止めてしまうという見方、ハビトゥスを「構造化された構造」としてのみ捉えてしまっているという見方、ハビトゥスを全く変容可能性の無いものとする見方、があるだろう。そこで、「ハビトゥス」が非歴史的な研究を招来する概念ではないこと、ブルデューの定式化した実践産出のメカニズムが歴史的な変動を説明し得るものであること、について論ずる。また、ブルデューの理論に於いて、いかなる歴史的変動がどう説明されるのか、という点をも明らかにする。

2.二つの事例研究

ここでは、実践と場との関わりを論じているものとして、共に未邦訳の文献、ブルデューの“Homo Academicus” [Bourdieu, 1984.] と、P.シャンパーニュの「文化資本と経済資産」 [Champagne, 1987] (2)とを取り上げる。何故この二つを取り上げるのかと言えば、第一に、両者とも、ハビトゥスに基づく実践が場の内部の変容といかに関わり合うのか、という点や、その際の資本の変換の過程等に注目して、実践産出を分析しているからである。また、特に後者を取り上げるのは、「プラチック理論」はブルデュー以外の学者によっても多方面に亘って展開されているのだ、という事実を踏まえているからでもある。加えて、第二に、両者とも、歴史的な変動過程の分析を試みているからだ。

“Homo Academicus”では、大学の場合という、固有の論理を持った場に新興勢力が参入し、それと旧勢力とが対立して、結果的に場の論理が変容して行く過程が、「文化資本と経済資産」では、市場経済メカニズムの農村への浸透という劇的な変容の渦中で、農民が経営を自発的に維持・相続する過程が（経済的側面には還元出来ない過程が）、分析されている。

(1) 大学という「場」（“Homo Academicus” から）

ブルデューに拠れば、フランスの大学の場合は二つの敵対的なハイアラーキー化原理によって組織されている、という [Bourdieu, 1984 :70~88.]。一方は、相続した資本と、現に持つ経済的・政治的な資本とに照応した、社会的なハイアラーキーであり、他方は、科学的権威や知的名声といった資本に照応した、特殊な文化的なハイアラーキーである。両者の対立は、二つの競合的な正統化原理の間の対立の場所である大学の場の諸構造自体

に固有のものなのだ。ここで、正統化原理とは、第一に、現世的・政治的なものであり、そして、大学の場の論理の中に於いて、当の場が、権力の場で効力を発揮する諸原理に寄り掛かっている、ということを示してもいる。

例えば、右翼に投票したり、法律を教えたり、ローマ・カトリックであったりする大学人と、左翼的見解を持っていたり、高等師範学校を出ていたり、ユダヤ系であったりするそれとが居る。前者の中には、様々な公職を果たしていたりはそのものの、出版された本が無いような者がある。また、彼らは大家族出身者であることが多かったり、裕福かつ実力者であるという傾向が強い。一方、後者は、本を多数出版している者も多いが、資産の点では前者と比べものにならない。ブルデューは、大学の場の成員の出身階層や家族構成、宗教的背景、政治的見解と、彼らの研究領域とを関連させながら論を進めているのである。即ち、それらの諸要素が相俟って、大学の場の対立が形作られている訳だ。この場の中に在る成員は、各々の意志に従って進路を選択しているのだが、実は、その選択は、上記の諸要素の身体化の産物、ハビトゥスの産物なのである。この点に於けるブルデューの分析には、確かに、階層関係の再生産の強調が見られる。

前段落の記述からも判ることだが、ブルデューは、支配階級の中に在りかつ支配階級に支配されたものとして大学人を捉えてはいるものの、大学の教員の集団を一つの集団として扱っているのではない。前記の如く、或る教員の政治的見解一つを取ってみても、大学でのその人の位置のみならず、その出身階層や専攻科目迄をも考慮に入れなければ判然としない。だから、大学の教員の集団を単一で一枚岩的な秩序を持ったものと捉えることは、不可能である。ブルデュー自身は次の様に述べる。

教授達の集団によって組織された一種の集団的防衛の様に思われるかも知れないものは、何千もの、独立してはいるが調合された再生産戦略の諸結果や、その集団の保護に効果的に寄与する何千もの働きかけの諸結果の集積でしかない。何故なら、それら諸結果は、支配者のハビトゥスである社会的な保存本能の様なものの産物だからである。

[Bourdieu, 1984 :196]

そして、「再生産戦略」は、大学の場の論理によって為されるのだ。ブルデューは、「場」が、例えば大学の場の論理が、相対的に自律的であることを指摘すると同時に、或る専攻科目の場が他のそれに影響を及ぼすということを述べてもいる。「資本の種類と権力の形態」(Especies de capital et formes de pouvoir)と題された章の内、「共犯としての敵対者」(Des adversaires complices)という節以降がその典型である[Bourdieu, 1984 :149~170.]。

ここで例示されているのは、R.バルトとR.ピカルとの間の対立だ。ピカルは文学研究に専心する教授資格者であり、バルトは教授資格者ではなく、かつ、文学以外の言語学や精神分析学、社会科学等を摂取した研究者であった。つまり、彼らは、互いに属する場が違うのであり、対立の原因もそこに在るのだ。言い換えれば、或る場の中には更に複数の場があり得るのであり、彼らの対立とは、各々の場の論理によって与えられた役割を各々が果たした結果に過ぎない。

1960年頃迄のフランスの大学の場に於いては、教授を目指す学生の採るべきコースは決

まっていた。即ち、教授資格試験に合格し、次いで博士号を取り、最終的には教授資格試験の審査員になる、というものであった。「最終的には教授資格試験の審査員になる」ということは、教授達は自らの経て来たコース（大学の制度）を再生産するべく努めるということの意味する。しかし、1960年代に入って、言語学や人類学等の科目が新たに影響力を増すにつれ、事態は変わって行く。というのも、伝統的な教員採用の仕方では考えられなかった科目を専攻した者が大学の場に参入することにより、伝統的に正統と見做されて来た科目の正統性が揺らいで来たからである。例えば、1960年頃迄は、伝統的に、大学の文学の教授になりたい者は、教授資格試験を通り、文学だけに（例えば伝統的なラシーヌ研究だけに）専心していれば良かったし、それで教授のポストへの道も開けた。ところが、1960年代に入ると、文学の教授資格を持たず、文学以外の科目を応用して文学研究をする様な新参者が教授になり得る事態が生じた。結果的には、新参者の大学人の増加に、伝統的な大学人が危機感を抱いた恰好である。前のバルトとピカールとの対立も、こうした事情と同じ根を持つ。大学の場には固有の論理があった訳だが、様々な背景を持った勢力が奔めき合う事態が生じた結果、正統性を巡っての闘争が勃発したのである。

上述の様に、大学の場に固有の論理は変容し得るものではあるが、但し、その論理は急激に消滅するものではない。例えば、大学の場で新参者のポストが確保されず、新参者が助手等のポストにしか留まれない様な状況があったからこそ、1968年5月の出来事が出来たのだ、とブルデューは分析する。つまり、大学の場の論理は、確かに変容しつつあったのだが、その変容の渦中に於いては、依然として従来通りの論理が効力を持っていたのであり、それ故、新参者の不満が鬱積したのである。場の論理は、従前の姿を留めつつも少しずつ変容して行く訳であり、場に固有の論理が変容するということは、大変な時間と困難とを伴うものなのだ。

（2）農民の家督相続と経営維持（「文化資本と経済資産」から）

シャンパーニュは、プレス地方の農業という単一の場に於ける、家督相続と経営維持の実践を分析する。

1960年代、農民の野望とは、継ぐべき家族経営さえ有ればそれを継ぐことなのであった。しかし、1980年代の後半には事情も変わり、大部分の農家では相続者が居らず、かつ相続を望みもしない。その様な変化の渦中で敢えて家督相続する人の実践は、分析に値するだろう。

シャンパーニュは、農業の場の「社会空間」を、4つの集団から成るものと見る。それは、第一の次元として、経営規模で分けられ、10ヘクタール以下の最小経営農家（これを仮に集団Aと呼ぶことにする）、中の下の経営農家（集団B）、中の上の経営農家（集団C）、50ヘクタール以上の最大経営農家（集団D）である。勿論、経営は、AからDへ移るにつれて楽になる。この分類に、第二の次元として、学校的・文化的な次元を加味すると、それらの集団の社会的諸特性が現れる。集団Aは、相続人も無く、設備等の近代化にも無関心で、近くの都市で労働者や商人（つまり非農民）になっている親族を多く持ち（ということは、地域的特性とは無縁だと言えるだろう）、教育熱心（とは言っても、技術教育の様な実用的なものであるが）である。集団Bは、経済資本は中庸であって、親族の殆

どが地域に根ざした農民である様な人々の集団であり、学業や設備の近代化に無関心で、技術的・経済的変容を生き抜くのに精一杯だ。集団 C は、近代的且つ大規模な経営で、経済資本も豊か、市場の現実基準に則った経営を為している。集団 D は、教育熱心で高学歴、実践的カトリック信者、整った設備、全国紙の購読、という特性を持ち、地域的特性から最も掛け離れた集団である。このことから、経済資本は他の種類の資本との対比関係に於いてしか意味を成さない（経済資本の量だけで実践の方向性が決まる訳ではない）ことが判る。そして、地域に残って家督を相続しようという者の多いのは、地域的特性の色濃い集団 B, C だと言えるだろう。

上で見た様に、農家の経済的成功は学歴と相関しない。農業の場に於いて、経済市場メカニズムに適合するのに必要な文化資本の形態は、「近代的」なものと思われ、「違和感がある」と感じられる生活様式に対する、農民の適応力の中に見出されなければならない。今や、地方の農村にも経済統合の波が押し寄せ、かつ、テレビ等の普及も農民を国民的な空間に統合するのに一役買っており、農村の脱地域化が進行している。そこで、シャンパーニュは、家族関係の資本や、職業関係の資本への着目を通して、「農民の適応力」を考察する。

先ず、家族関係の資本（家族的な社会関係資本）を分析する為には、農民が非農業親族をどれ程持つかという、家族成員の社会的分散を調べなければならない。家族の各成員の社会的軌道は、社会関係資本の形態を構成する。だから、地域に根ざした経営を特性とする集団 B, C には家督相続人が多いし、地域的特性との縁が薄く学校教育を重視する集団 A, D には相続人が少ないのである。

続いて、職業関係の資本であるが、これは職業組織や組合主義と関係している。本来、地域的な次元とは、地理的・道徳的・社会的な秩序をイデオロギ的に身体化するのに理想的な社会集団を作るものであろう。だが、市場経済は、地域外的な論理に基づく経済の過程を適用して、地域を徐々に変容させて行く。本節の冒頭にも述べた、1960 年代には殆どの農民が家督相続を望んだのに 1980 年代後半になるとそうではなくなる、という現象も、市場経済メカニズムの浸透によって惹起された変容と見做し得る。その様な変容過程の中で、農民は、経営資本を増大させ設備投資する為に組合を作り、銀行に依存する様になるのである。変容に適応するには会計事務や技術革新等の必要が絶えず生じるので、農民は最早、市場経済化から逃れられない。こうして、市場経済化に適応し得る農民は新たな社会関係資本を形成しながらそれに適応し、適応し得ない農民はかつかつな生活が続けることになる。

地域的な農業の場に於ける農民の実践は、経済資本とそれ以外の文化資本や社会関係資本との相関によって定まるのであり、シャンパーニュは次の様に述べる。

例えば、経営の経済的側面と経営者の子供の学業との間に見られる関係は、学校の就業過程が親の経済資本に直接的に左右されるということを意味している訳ではない。学業の成功は家族（広い意味で親族も含んだ）の文化資本と結び付いているのだ。（中略）経営を経済的に発展させる為のものも、経済的次元の中に自らを変換するのも、共に文化資本なのである。（中略）社会学者が経済資本と呼ぶものは、経済資産と、文化資本やそれを持つものの関係の資本との、独特の結合の産物なのである。〔Champagne,

3.歴史的な変動過程の分析とハビトゥス

前章で見た様に、場の中に在る行為者は、「社会的世界がその当事者に客観的に与えるチャンスの一定の状態」に対して、自らのハビトゥスに基づいて実践を為す。

前の“Homo Academicus”からの引用に於いては、場は複合的であること、行為者の実践は行為者自身の属する場の論理に左右されること、そして、行為者のハビトゥスは、行為者の背景にある諸要素の混合によって「構造化される」こと、が述べられていた。しかし、同時に、社会的世界の側の変化によって場の論理も変わり得るということが指摘されているのも忘れてはならないだろう。行為者の実践は彼らのハビトゥスに基づいているから、彼らは社会的世界の側の変化が自らの場をも変容させつつあることに気付いた時、その変化に逆らおうとする（バルトに対決を挑んだピカールの様に）。何故なら、ハビトゥスは「恒常性」と「自己防衛」とを保とうとするからである〔Bourdieu, 1980 :101～102. =1989 :97〕。その結果として、場の内部で正統性を巡っての闘争が始まる。バルトとピカールとの対立に関しては、結果的に、バルトに軍配が上がりピカールが敗北したと言えるだろう（勿論これは便宜的な言い方であって、大学の場合からピカール派が一掃された訳ではない）。バルトは、社会的世界の側の変化が大学の場にもたらした変容に正に適合し得るハビトゥスを身体化していたのだ。従って、このことから次の様な推論が成り立つ。即ち、それ迄ピカール派であった大学人も、彼らの自明性の中に在った自らのハビトゥスの意識化を否応なく迫られ、結果として彼らのハビトゥスは変容して行った〔Bourdieu, 1980 : 92～93.=1989 :88〕。ハビトゥスが「変容する」としたら、先ずこの様な場合が考えられるだろう。

「文化資本と経済資産」に於いては、農業の場で農民達が諸資本を如何に変換するのか、という点に目が向けられている。実は、この論文にハビトゥスという概念は登場しないのだが、これがブラチック理論に則った研究である限り、農民の実践から農民のハビトゥスを捉えることが可能である。

先ず、集団A,Dには相続人が少なく、集団B,Cにはそれが多い、という事実は、相続の為され方が経済資本のみによって規定されている訳ではない点を衝いたものである。農家の経営の相続は、農業の場の中の諸集団の各々が有する諸資本の結合の産物であるが、諸資本の結合の仕方は諸集団のハビトゥスに方向付けられているだろう。また、我々は、経済市場メカニズムに対する農民の適応についてのシャンパーニュの分析を、「適応」という言葉に伴いがちな「受け身なもの」というイメージを払拭した上で読む必要がある。確かに、経済市場メカニズムの浸透は、経営を放棄する意志の無い農民にとっては受容されるものでしかなかろう。だが、それは単なる受容ではない。行為者の実践は、一方的に「環境」によって決定されるものではないのだ。行為者は、「環境」の変化の渦中に在って、茫然自失しているのではない。彼らは、その時々に応じて、彼らが実践を為す際に唯一拠り所とし得るディスポジションたるハビトゥスに則って手持ちの諸資本を操る。結果として、農業の場に在っても、同様のハビトゥスを持つ者同士が自然に集まり、彼らは、組合組織等を形成しつつ、即ち、伝統的な諸資本を新たな種類の社会関係資本に変換しつつ、

実践を為したのであった。当然、旧態依然とした経営を行う者も居るし、新たな社会関係資本の形成に失敗した者もある筈だ。その様な仕儀に至ったのもまた、そういった人々のハビトゥスに原因があるからだろう。

4. 社会空間としての場に於けるハビトゥス

ハビトゥスが生み出す戦略は、「客観的諸構造の産物であり、客観的諸構造を再生産する傾向を持つ」し、又、実践は、「過去にハビトゥスを作り出した諸条件に内在する規則性を再生産する」[Bourdieu, 1980 : 91~103. =1989 : 86~98]。前に挙げた事例研究からも察しが付く通り、「再生産」とは、全くの同一物を生産し続けることなのではない。未来に於いて行為者を襲うであろう出来事は予見不可能だが、出来事に対して、行為者が自らのハビトゥスに則って実践を為すことは判っている。そして、実践の原理となるディスポジションの構造であるハビトゥスが過去の産物である限りに於いて、実践の多様性に限りがあるのは明らかであろう。行為者は、新たな出来事に対処した時、その出来事への対処の仕方そのものを自らの過去として記憶する。そして、その対処の仕方もまた「過去にハビトゥスを作り出した諸条件に内在する規則性の再生産」に他ならない。言い方を換えれば、それ迄に無かった出来事に対処しつつ行為者が実践を為すということは、「過去にハビトゥスを作り出した諸条件」に新たな「条件」を付け加えてハビトゥスの「規則性」を更新させることなのだ。実践はハビトゥスを原理としているのだから、ハビトゥスを作り出した諸条件に内在する規則性を実践が再生産するのは当然であって、そのことを、ハビトゥスはそれ自身の持つ規則性を維持する（「恒常性」、「自己防衛」、先程の“Homo Academicus”からの引用文では「社会的な保存本能」、等という記述はこの謂であろう）、と言い換えて良いだろう。ハビトゥスは、実践原理として実践の歴史的な首尾一貫性（規則性）を保証しつつ実践を産み出し、社会的世界から与えられる出来事に対処して行為者が実践を為す度に更新されるのだから、非歴史的な研究を招来するどころか、歴史的分析にはなくてはならぬものなのである。社会的な変動も、ハビトゥスの現れと絡めて説明され得る(3)。

例えば、“Homo Academicus”の例を実践産出のメカニズムに沿って簡略化するならば、次の様になるだろう。大学の場合にはバルトとピカルとに代表される二つの派閥があり、両者は各々固有の場の論理に則って（各々のハビトゥスに則って）いたが為に対立した。それはまた、言語学等の新たな科目が影響力を増した結果、従来大学で支配的だった側が、それまで被支配的であった新興勢力に正統性を奪われるに至ったという、正統性を巡っての衝突なのであった。

一方、地方の農業の場での、農家の家督相続及び経営維持の実践を分析したシャンパーニュの論文を、同様に簡略化してしまえば、以下の様になるだろう。地域的特性と密接に結び付いた文化資本を有する集団の成員は家督を相続する。そして、彼らは、地方への経済市場メカニズムの浸透という事態に直面した時、自らのハビトゥスに基づいて様々な社会関係資本を結合させ、新たな資本を形成しながら、今までとは異なった地域的農業経営の在り方を創造した(4)。

畢竟、ハビトゥスとは、行為者の実践や行為の方向性を指し示すものであろう。独自の

論理を持った場の中で、行為者は、ハビトゥスに方向付けられながら、実践し、行為する。では、行為者がその中に位置を占めている「場」とは、如何なる構造を持ったものなのだろうか。

社会的な場とは、「多次元的な位置空間」である〔Bourdieu, 1985 :724〕。ここで、「位置」(positions)というのは、社会空間としての場の中で行為者が占める位置のことを指している。そして、「社会空間」並びに「社会的な場」は、次の二次元から成る。第一の次元、即ち、諸行為者の持つ資本の総量と、第二の次元、即ち、彼らの資本の組み合わせ（彼らの持つ全資本の中での、相異なる諸資本の比重。若しくは、彼らの持つ資本の構造）。この二つの次元の交差によって、行為者の社会的な位置は決まる〔Bourdieu, 1985 :724〕〔Bourdieu, 1994 :20~22〕(5)。

“Homo Academicus”からの例では、大学の場の社会空間、前の要約箇所でも引用した言葉を用いれば「二つの敵対的なハイアラーキー化原理」から成る場の社会空間も、相対立する二つの集団の持つ資本の総量という次元と、その諸資本の比重という次元とによって、構成されている。即ち、右翼的意見、法律専攻、ローマ・カトリック、等といった特徴と、左翼的意見、高等師範学校出身、ユダヤ系、等といった特徴との対立を第一次元とし、文化資本よりも経済資本の方を多く持つという特徴と、経済資本よりも文化資本の方を多く持つという特徴との対立を第二次元とした社会空間が、大学の場の「ハイアラーキー化原理」を構成しているのだ。

また、「文化資本と経済資産」からの例では、経営規模の大小を第一次元とし、学校的・文化的な次元を第二次元とした社会空間を析出することによって、地方の農業経営の維持・相続が分析されている。

社会空間の中に位置付けられた行為者は、ハビトゥスに方向付けられ、自らの持つ諸資本を基にして、社会的世界の中で、社会的世界の側からの出来事にその都度瞬時に対処しつつ、実践を産出するのである。

5. 結語—ハビトゥスの変容可能性とプラチック理論の展開とを巡って—

行為者は「場」のどの位置に居るのか、ということを示すのが、「社会空間」としての社会的な「場」なる概念枠組みである。そして、この概念枠組みこそが、ブルデューの理論に於いて歴史分析はいかに為されるのか（歴史的な変動がどう分析されるのか）、という点を明らかにする鍵なのだ。即ち、“Homo Academicus”からの例で読み取れることだが、ブルデューは、まず分析対象たる場（大学の場）を措定し、その場の多次元的な社会空間を析出する。続いて、その場がどのようにしてそのようなものになったのかということを、ブルデューは、社会的世界の側が場にもたらした影響（文学以外の学問領域の成果を文学研究に適応した著者が評価されるといった現象）、それに伴う社会空間内での支配的な勢力の移動（バルトラの登場）や摩擦（場の論理がなかなか変容せず、大学の場での新興勢力のポストが確保されないという状況が出来させた、1968年5月の出来事）、といった観点から分析しているのである。

しかし、「社会空間」としての社会的な「場」という概念枠組みには、飽くまで、観察者の視点から、言い換えれば、客観主義的視点(6)から眺められたものだという憾みが残る。

行為者は、実践に際して、場に於ける自分の位置を必ずしも意識している訳ではないのだ。だから、「社会空間」と称するものの中に複数の次元を設定したり、それらの次元の中身を特定することは、対象を観察し易くする為に観察者が行う作業に過ぎない。

そこで、観察者によるその様な作業が単なる客観主義的視点に終わらぬ為に、ハビトゥスという概念が必要になる。

ブルデューは、実践を、モデルとか役割の機能等に機械的に還元出来るものではないと考えている。そして、実践の原理となる諸々のディスポジションのシステムたるハビトゥスが、「規則への従属ではないが規則的な (régulier) もの」(ハビトゥスの定義から)

[Bourdieu, 1980 :88~89. =1988 :83~84] である以上、ハビトゥスに基づいて為される実践は、「無限で、相対的には予見不可能」である(状況が無限に在り得るから)ものの「多様性に於いては限界がある」(実践はハビトゥスによって限定されるから)[Bourdieu, 1980 :92~93. =1988 :88]。そして、ハビトゥスの現れとしての実践の内に、即ち、自分では自分がハビトゥスに制限されているという実感が全く湧かないまま為される実践の内に、ブルデューは行為者の能動性・自律性を見ている。つまり、ブルデューの理論に於いて、行為者の能動性・自律性とは、その時々に応じてその都度瞬時にハビトゥスが行為者の実践の中に現れる点に求められているのだ。

行為者は、自分の家族、自分の回りの人々、自分の育つ地域、自分の「環境」といった、個性・具体性の中で成長する。そして、その成長の過程で、ハビトゥスを「実践的に修得」(la maîtrise pratique ; practical mastery)する(7)。

行為者はハビトゥスをいかにして獲得するのだろうか。それを説明するに当たって、ブルデューは、「内面化」という言葉を用いずに「身体化」(l'incorporation)という用語を使用する。ハビトゥスは、人間が内面化する観念のシステムなのではない。それは、ブルデュー自身の用語を使えば、「身体的ヘクシス」(l'hexis corporelle)として「身体化」された、諸々のディスポジションのシステムなのである。「振る舞う」とか「語る」とか、或いはそれらを通して「感ずる」等といった実践、つまり、より身体に密着した実践を可能にするハビトゥスを、ブルデューはヘクシスと呼んでいるものと考えられる[Bourdieu, 1980. :117~119=1988 :112~115]。

だからこそ、幼児期や子供期には、ハビトゥスの変容が起こり易いだろう。実際、ブルデューもその点を指摘している[Bourdieu, 1977 :87]。つまり、彼は、ハビトゥスを変容させる契機として、子供の学校化(schooling)を挙げているのである。子供期に於けるハビトゥスの変容は、当事者たる子供にとっては全く意識化されずに為される場合が多いと言えるだろう。

一方、行為者がハビトゥスの変容を意識的に迫られる場合もある。これは、“Homo Academicus”からの例で判るだろう。社会的世界の側の変化に伴って大学の場の論理が変わりつつある時、それまでピカル派であった大学人も、彼らの自明性の中に在った自らのハビトゥスの意識化を否応なく迫られ、結果として彼らのハビトゥスを変容する場合である。但し、「恒常性」、「自己防御」、「社会的な保存本能」等といったハビトゥスの性格上、ピカル派大学人のハビトゥスが全く別のものになるということは考えられない。彼らのハビトゥスは、彼らが意識化し得た範囲内で、元々のハビトゥスの許容範囲内で、変わるのである。

「文化資本と経済資産」の例は、少し微妙である。農民は、市場経済メカニズムのもたらした変化に適応しようとした。だが、適応し得た農民は、受動的に変化に棹さしたのではなかった。彼らは、ハビトゥスの方向付けに添い（彼らは、自分のハビトゥスを意識化したのではなく、寧ろ意識化せぬままそれに則って変化に対処した）、諸資本を新たなものに変換することを通じて、変化を乗り切ったのである。変化の後、彼らを取り巻く状況が変わっている以上、彼らが今後体験する出来事も以前とは大いに異なったものになるだろう。結果的に、彼らのハビトゥスは、極僅かずつではあれ、変化していく可能性がある。

フランスには、ヴィットゲンシュタインの言う「規則」（[Wittgenstein, 1971. = 1978 :58] [Wittgenstein, 1953. = 1976 :160~163]）の方がブルデューの言う「ハビトゥス」よりも行為者をより自由なままにする、と主張する論者がいる[Chauviré, 1995 :552]。だが、私はその主張には異を唱えたい。ハビトゥスは、「規則」対「ハビトゥス」として対立的に考えられるべきものではない。ハビトゥスの変容不可能だと考えるから（確かに、ハビトゥスは、その定義上、極めて変容しにくいものであろう）、この様な主張が出るのだ。「規則を知ること」が「ゲームをいかに続けるかを知っていること」であるならば、寧ろ、ハビトゥスとは、その続け方を行為者に指し示すディスポジションとして、「規則」と「実践」とを媒介するものとして捉えられるべきである(8)。

最後に、ブルデューが自らの目指す理論の在り方を述べた一文を引用して締め括りしたい。

実践学 (praxéologie) は普遍的な人類学であり、それは、諸行為者は普遍的に歴史的諸構造を使用しているのだという事実を念頭に置きつつ、歴史性、相対性、認知的諸構造 を記録するものなのである。[Bourdieu, 1994. :170~171.]

《注》

(1) R.ハーカー他 [Harker, 1990 = 1993 :296~297.] の記述を引用しておく。「ブルデューが歴史的説明や歴史的な変容の説明を提供する気が無く、それ故転換の政治学を提供する気も無い（そして、彼の同語反復的な手法の論理を通じて提供することは出来ない）という批判である。彼の最近の仕事の中では、（略）現在のフランスの知的な場の起源の説明を構成している。けれども、この再構成的な歴史はブルデューの著作の特徴ではない。

（中略）何故様々な場が形成されるのかということに関する説明が不可避免的に消失しているからであり、それ故社会のトポロジーの説明が不十分だからである。」

(2) 私がこの論文 [Champagne, 1987] の所在を知り興味を持ったのは、宮島喬『文化的再生産の社会学』[宮島, 1994] によるのであり、同書の特にⅡ-7 節から得る所が多かった。

(3) この様な観点は、例えば、ハビトゥスを「諸行為者を厳格な決定論に閉じ込めることなく、諸実践に於いて相当な『プレイ』 (jeu) を許容し、とりわけ即興を可能にする」ものと捉える論者達から見れば妥当な見解であろう。[Chauviré, 1995 :552.]

(4) 彼らには農業経営を放棄するという発想が生じ得なかったろうし、その放棄が頭を過

ぎったとしてもそれは克服すべき課題として捉えられたであろう。

(5) [Bourdieu, 1985 :724] 及び [Bourdieu, 1994 :20~22] が、「社会空間」に対して分かり易い説明を与えている。だが、「社会空間」という概念を縦横無尽に駆使して成果を挙げているのは、何と言っても「ディスタンクシオン」[Bourdieu, 1979. =1990.] である。

(6) ブルデューにとって、「客観主義」とは、レヴィ＝ストロースの構造主義を指す。例えば、レヴィ＝ストロースは、贈与交換の関係を空間の中に図式化した。その図式化では、対抗贈与の為されるタイミングは全く無視されている。

レヴィ＝ストロースは、M.モースの論文集への序文 [Lévi-Strauss, C. 1968. =1973] の中で、「統合された全体は各構成部分よりも遙かに全体的である」というモースの言葉を、贈与交換の当事者達の主観（モースの言葉に従えば、「与える義務」、「受け取る義務」、「返礼の義務」、等を総合させる一つのエネルギー源としての、「ハウ」「マナ」等の観念）と、客観的に観察され得る交換の形態（観察者によって図式化可能な互酬性の循環形態）とを切り離すことなのだと言曲解し、その故を以て、モースはモースの言葉に忠実でないと批判している。モースが「統合された全体は各構成部分よりも遙かに全体的である」という言葉を使ったのは、「ハウ」「マナ」といった当事者達の主観的観念の作動によって交換は行われるのだ、という点を意識していたからなのに、である。レヴィ＝ストロースは、客観主義的分析に主観主義的動機付けを盛り込み得る可能性を、みすみす逃してしまったのだ。

贈与交換は、数学的構造としてののみ表されるものなのではない。それは、時間（例えば、対抗贈与の為されるタイミング）の観念、及び形式的モデルには還元出来ないその観念の変異までもを加味して理論化されねばならない、というのがブルデューの主張である。対抗贈与のタイミングは、その当事者たる行為者の胸先三寸に掛かっている。そのタイミングを見計らうということ（このこと自体、ハビトゥスの現れと言えよう）は、あらゆる贈与交換につきものの戦略の一端なのである。だから、この場合、時間の次元の中にこそ行為者の「能動性」が顕著に現れると言えよう [Bourdieu, 1980 :178~183 =1988 :173~178] 。

(7) ここでは“la maîtrise pratique”を「実践的修得」という風に訳しておいたが、これは、「実践的統制」とも訳し得る。因みに、[Bourdieu, 1970. =1991.] では、「実践的支配」と訳されている。これは、身体化されたハビトゥスが実践に際して瞬時にその都度現れ、その結果、実践が規則性を維持したものになるような様態を指している。“maîtrise”という言葉には、修得したものに統制されている、という含意があると考えられる。

(8) プヴレス [Bouveresse, 1995 :573~594] は、「規則」と「ハビトゥス」を対立させることなく両者の間の差を掘り下げ、社会生活の中に両者が共存しているという事実を目を向けるべきだと主張している。

《参考文献》

- Bourdieu, Pierre. 1970. *La reproduction*, Ed. de Minuit.
= 1991. 宮島喬訳 『再生産』 藤原書店
- Bourdieu, Pierre. 1977. *Outline of a Theory of Practice*,
Cambridge University Press.
- Bourdieu, Pierre. 1979. *La distinction*, Ed. de Minuit.
= 1990. 石井洋二郎訳 『ディスタンクシオン』 1, 2. 藤原書店
- Bourdieu, Pierre. 1980. *Le sens pratique*, Ed. de Minuit.
= 1988 (1巻); 1990 (2巻) 今村他訳 『実践感覚』 みすず書房
- Bourdieu, Pierre. 1984. *Homo Academicus*, Ed. de Minuit.
- Bourdieu, Pierre. 1985. "The Social Space and the Genesis of Groups",
Theory and Society, vol. 14, no. 6.
- Bourdieu, Pierre. 1994. *RAISONS PRATIQUES, Sur la théorie de l'action*,
Le Seuil.
- Bouveresse, Jacques. 1995. "Règles, dispositions et habitus",
Critique, no. 579-580, : 573~594.
- Champagne, Patrick. 1987. "Capital culturel et patrimoine économique",
Actes de la Recherche en Sciences Sociales, no. 69. :51~66.
- Chauviré, Christiane. 1995. "Des philosophes lisent Bourdieu",
Critique, no. 579-580, :548~553.
- Gartman, David. 1991. "Culture as Class Symbolization or Mass
Reification? A Critique of Bourdieu's Distinction",
American Journal of Sociology, vol. 97 (2)
- Harker, Richard. et. al. 1990. *An Introduction to the Work of Pierre
Bourdieu: The Practice of Theory*, London: The Macmillan Press.
= 1993. 滝本他訳 『ブルデュー入門—理論のプラチックー』 昭和堂
- Lévi-Strauss, Claude. 1968. "Introduction aux écrits de Marcel Mauss",
Mauss, Marcel. *Sociologie et Anthropologie*, 1968. P. U. F.
= 1973 有地他訳 「マルセル・モース論文集への序文」,
M.モース 『社会学と人類学』-1, 弘文堂.
- 宮島 喬, 1994. 『文化的再生産の社会学』 藤原書店.
- Wittgenstein, Ludwig. 1971. *Philosophische Bemerkungen*,
Oxford: Basil Blackwell.
= 1978. 大森他訳 『ウィットゲンシュタイン全集』-6. 大修館書店.
- Wittgenstein, Ludwig. 1953. *Philosophische Untersuchungen*,
Oxford: Basil Blackwell.
= 1976. 藤本隆志訳 『ウィットゲンシュタイン全集』-8. 大修館書店.